

想參著聞奇集

五

三四二

想山著聞奇集卷之五

目錄

- 一 拝谷觀音利益の事
一 蜂の熱念小瓶と吐出之事
一 天狗より運びてく狹蛇のめと於處に者之事
一 にち峰の酒呑つば峰の板之事
附贈記の事
一 馬の言ふあらの事
一 程の人と化く相對死とうへり事
一 膜石の事
一 蜂あり観世音菩薩現し虎かの事
一 蛇蛇の誤信と重なる事 善財蟹く化する事
一 線道玄端と戦つる事
一 蟻蟻のめを天象と捕つる事
一 蜂後光螺り化してゐる事
一 美底於く化する神祇の事

柳谷觀音利益の事

京都西山の肉牌の方より、二重門より楊谷と云所
あるもの而り。五顧山楊谷寺淨空家栗生
光明寺本といふ寺あり。

累傳記の如く、八面山八人皇五十一代

平城天皇の御宇元年、般若法僧、修都、草創の地に
奉るハゆき。眼観菩薩脇士ハ將軍地彦兄弟の天を
右をもる。春日大明神の活現ともい或之化人の化を以て
主體觸へ。後桂洛東に立。附夢中より化人の告と蒙りて
西山の柳谷より感得。遂至す。かくして十三佛の
石像と剝々溪谷に安置。かしら多念より心
僧都も此山へ供養。其來津より修竹ハば地より

石室に龕佛三体。又経の大菩薩常に本尊を
名付。又

白門院勅令にて、水引と七堂伽藍と庭主とをして
莊親よりして、後地農兵机あり。破壞せ。くどもす。
又重ねたる處。奇麗多う。とくに長の頃

宝室志菴と人並み。七間正面の佛閣と庭主

あひづるが脚今の寺堂と代へ

帝乃勅預可。御供作成。む

東山院

靈元院の

本帝ハ後作も終は美よ。す。

量室是海と人り

勅

御供預可。御供作成。む

新家院の

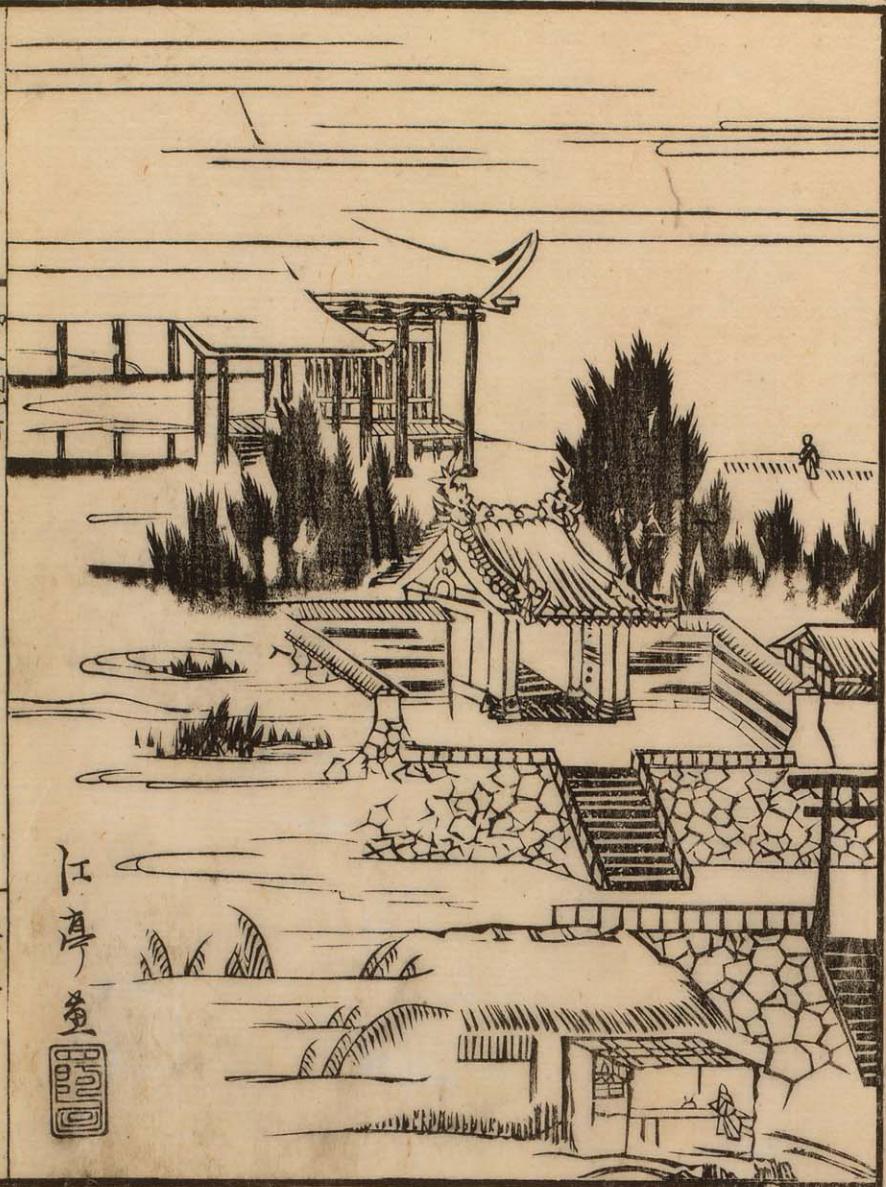
院も後作も御供預可。御供作成。む

新家院も御供預可。御供作成。む

新家院の

院も御供預可。御供作成。む

さんよもさんいん
手の報音の精光の中よ西側三十丈の靈像を刻ま
しめ波がせきをひく御奉るの則生を
危難模死模難とまぬきをせらひとれり右寺記の故
異記も都名古山法
于天保九年戊午六月は寺へ落成せり人數も
絶する御衣山寺より堂内に二百六十人も龕り波
廣く有るども一唐より餘り作山うる龕り人數を
多數とせ行はば菩薩と阿彌陀と巴彌陀と龕りと
やうち別に法眼師と寫すゆの故多う眼龕の者龕り
廣く有るも悉く眼龕のみ世よをやくと眼龕のもの
多すのうと警きとく靈渙の事と同よ管口と探て
一切の眼龕は菩薩と伝へて波がさるはうとの言葉
氣すよハ向く林ども傍り度大うる坐高殿なりて波



江亭



利益と云ふてゐるもの多くて、向よき人の云私ハ風眼
うへて修業端始むと云せ一うども珍よかしも見えぬ
極く成やほば寺へ來るゝやうに堂へ着て候
まく漸二七日よりびつるよもや少一ぱくえ初やうと
云教感嘆擔うり微せりにあよそ傍り居する老人の
私も肉癖と成さずにはなれず、城やゆよ今自うて
僅十日着り辰巳眼精あぐねるは城御よきまき
事也と云たりうは肉ゆそ育人を歎切づき人の仰りつま
うもとと向う又傍の人のことかくまハシテ
は産の向の方よ唐の比丘尼もは間中を而え
ゆまざら水うち繩侍ひくゑうひいよまざと一
イヒ威儀とも一筋うり繩すじ引松ようりや

あきの日ハ年利益乃より云々又信の者の云
ふるは簡易この一の移動よ所の曉る事もさへあ
連すてし本に引すし城より向むるもの育田と
城底よりのことを向ひ娘も今般よりは家人をあう
御ゆうにうりうりうど云移動よ同よづきもあふ
時もひよかく送りと申りて一七日城ハ二七日三百石
えと六と活ま人ふくゆり中ゆきて百五七百
無るも四度りぬを多くの伝ひの厚高もつて應永寺
たりのが又阿流院堂の玉つるの名氣高
寺堂うち左の山院堂の方へ其處よ細き繩一筋

柳谷觀音

見るよ阿弥陀堂の善びの方ア廻り自の身をな
まのハ右庵と云ふ。後而行つて自今も厚
うちゆもその庵より後り行ひのちも其の今
悉く利益と云はれ
歩あ葉たりう後より利益の事と於名而昌徳寺を
何故書乃きドタニ也正當ア思バ國學
龜るともハ新が事も内用も其人乃先せ
も秀穉も其事無やうすり前乃たかよ即日夜節
本居宣二郎と云ふ者某也此二事の右庵
人の贊止と云ふ事と乎も其事よへて發
せしに至復の事多處ハ今多く人殺の合事と極
廣の如ク多ハ人殺職六七十人と或甚ハ三四十

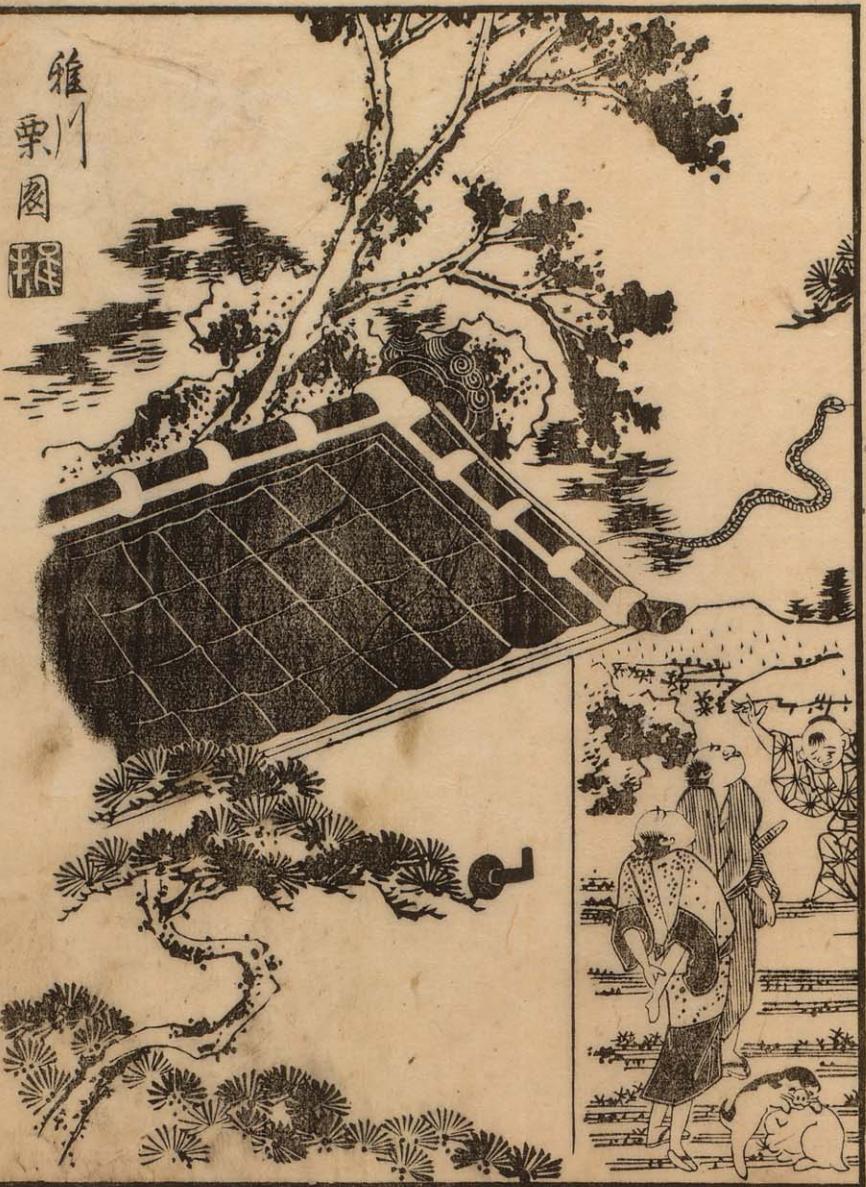
四五
阿弥陀堂よりも即ち事あるのを辛堂のとみもう
せあらゆる妙智力あり故焉一諸人よもせへて後り見
彼の事とす便記

地の想念小地とせぬと幸

讚美も松の内よ林より地より一旁の林山とぞの
林ちの毛よ云甚りちと意の底よもめ葉と
鶴く生入るありやがハ壁ふくねあらりを並び方よも
るい向地漏あり圆ト枯り云甚き或時をサ等
出で餘も立てて蛇は云藏の底根よりか云藏のあと
底より云葉の葉と見有思ひ入所へて云うの底根
主葉と稱ひて花鶴く立てどもするひ三間地も漏

居るまへ花移りほゞとすをよりトへばとく唐豆
ども又風々樹と傳ひてえひ云葉の底根(よし根)
初めひどく、の葉とみて居く花骨たるよみ及くも
射く(居)り引のくもる事無く十日程よ及く
ども精思ひ止まつて花骨てと居る事數十度
くもよく精を凝る念と拵く花骨うちゆゑ
ひく後ハ行ハリ思ひじきびと花骨又見物の
くも多く集ひ日も難くと経日うづく居るより
も圓くの花移る勢ひよより小地とせぬとよ
小地ハ寒のう一花骨已と云又花骨ほど一トへ
居く丈切よ元くおの小地ハ行うまとと見居
くもよ葉の方(法)近當時の内よ忽ち二三の立候

蛇と威權の如きと存るよ吾は
アリて行きて持來りテハ唐
シテみも河を大勝の傍を立つるに何の若も
射數一捨アリトビ事安永年中の事
うの林や畠或ひ隠店何某の者もとく明よひ事と
見居アリテ廣野清助と云人へ言ふ事
餘り奇術の事多く自第又事多く称を馳せん
ゆきと云ひて云ひて云ひて云ひて云ひて云ひて
清助の近隣に戸小荷半天神下或方のをとて陸戻
右天神下の水道端よりて餘り乃大蛇と云へて居
るのほふを焼火箸を鐵板も運ぶ
たり蛇と若痛よアえどもかわらや元ア即ち



ちる頃ノイタカヒノ又ハテ焼太着ノシニシの心せうく
時よりうり小蛇と呼んでアリモトヨ先人別ナリ久くあ
をやうする漁丸ノ陸ノ所と淺ノ思モモシゲ生
サハ小蛇の者と並行ナリ傷ナリ貝物ノ唐木
傷車ノ事ニヤリナキハメ竹枯の事とまもるも
アリモトヨ云ナキ由ハ端津一捨かノ親蛇もナ
殺一捨と云ふ事ナリモ明ニヨ用ナル事ナモ
毛と以ちる事ナシ以前深別ナリナキモ無ニヨリモ
トキアリナ清助ノわざアリ地主賄主モリモナム
リ卵生モリナキの故服中ノ小蛇の至らばナリ
ルネモモの故歎ノ急ち取ちと成リナシ矣成事
神御ノ御ナシ事と呼ム所と接又他の人ノ脚とアリ

車も生鐵を鉄揚仙へひゞく自家の体と吹生も鞠も
行うと支度ふれず車移ぐる兜鞆の馬交車ともちる

我が國名古屋鷲童の真慶寺の先僧記と同にて
之は高ニ茶の佛觀寺の住持作成中の因縁此の
證興寺へが頤寺へけ便俗より毛進面して法事と
す一房毛矣幸雲の裏の方ハ雲龕うるよ邊
高さニ毛重根の處の同り蘿蔓と無房ニ雛鳥の
巣立廻り居るとトトロ蛇の風と見ゆ一や二三百
丈とうづの階所毛首と毛とよきども行毛
登るべき事も叶ひぞと遂よ拵つと奥座り
主より居毛後毛修飾毛詰び蛇毛丈切よ死す

予時一月廿日居る雛鳥も死くニ又も四丈も上る
落たら毛毛行故と云事更に毛毛毛の蘿と前
料理見るに際中より下毛毛とやまと蛇故及居る故跡
の毛腹と裂見るよび毛も小蛇殺大げし居ると
現り自食りあり達文政年より名古屋へが頤寺の
無而毛有り毛毛と呼毛ととて又毛よ附毛とゆゑ
毛毛毛毛と自相の事毛又毛よ附毛とゆゑ
記 源毛

天狗毛連行毛毛と被毛のゆと汝事毛者の中
文化六年乃奉毛が義濃國毛と名毛毛村より五郎と
ソ者毛年十而毛時裏毛周毛入居毛天狗よ毛毛
先自毛の家毛の入毛毛と國祖の松の木の梢毛行毛と

はねと勝校もく紫もく枝すもせざる木もく日束
天物の来ると云侍つてあ
紫もく一切を多めに枝の木本の
たるる事ハ七の卷より至る天物ハ泉のちうさ経の書寫めの
蘿もく至る事より四十里越行く十日を猶の
松の木のとへ行く檀の天物大勢より合居く酒場の
而すく船支りて連らまく歩行く或時大名の
税儀の所へ行く地乞と食ひてよ誰も咎むるゝと
すらまく遂に三年居く後神祇のめとゆく海
鬼とゆくとあくも外うて本うく西洋行とあくも
石鼓石中ろぬとゆくとゆく御備隊と成く橋ごとくに
港とく城村の居の池の太地とおも紫りと心と書寫
西と云ふ行湯もくじく



海居の故尾島の板をもとて引く。國の稻の穂ともうそ
 携せらまするが教ゆるが癪もか病も燃へり。とば國の
 出来のあやめのもの河の國の出來のあやめのものと天物が
 我ふどにりませ。故う船よ出来のあやめのそひと
 犬村のふみな出でハ近隣の事より友達の名より。ひ易
 り。うきよの呪儀神うりでハ皮をざりしと。かを
 ありもと右の通り。三年の間の天物異の呪ハ世く。你安
 事のよあるまきよあり。天物の事ハ而くよす。天物
 にち蜂の酒共へ深路の飯の事。

附蜂記の事

義濃の国郡と承よにち蜂と云ひ原野よ穴と場
 何んの蜂と尋たの蜂よりハちひと。網羅くの

大指程の大きさ。黒と多。大き形狀まれ。其の大き
 蜂なる。よ。は蜂の穴と。ほくと二戸。鴨りも。蟻巣のと
 嘴と。めの。灰吹のと。うる。壺と。蜂の巣のと。うる。か
 りの。の。蜂の。中。の。よ。漆と。能塗。日。冰の
 漆ぬね。ね。中。中。多く。城花の。轟と。ほく。乳草。と
 入。虫。一。壺。よ。蟲。と。又
 ち。め。き。の。う。て。蓋。と
 捕。く。蜂。と。虫。又。と
 あ。り。に。貴。川。も。捕。ゆ。る。と
 ち。り。多。き。の。に。始。あ。
 き。を。十。佐。き。の。もり。
 ま。金。ア。る。蟲。と。か。く



蜂の事



蝶の事

はち漏連版へと音事と
お酒酒へと味の義事へ
倫にものもくの事と
どもまくはうるうへと圓へと生もむうるものうきども丈へ
義へと古事記のくもく味のうもくもや行旅へと
と酒者猪へと七八日酒君へと後忘どる徑へと外
敵へとものとが薬痘よ豚の急は急の薬痘へとハジ
一疊半と百丈程へと買ひ事へと小虫へとへと冬糞の
食と酒事へと進化自然へとみへとくらへ
まれ事へともまた智を事へと咲ひへと見と
感むるはと餘りの事へと萬物の靈へと自を
免條の名と前も豈年に飢春へとあきらかく
餘く地へと漁へと其の面をや付まつて荷と改事の

或もトの難候へとくへんひあくみのへと漏連版へ族
多く蜂へとありぬの事へと蜂の用へと豆と作ぐ
而ものと唐へと事へと何へと同よ王へ蝶のあき
眼へと角へと胸へと細き毛と生じ唐へと毛も前よ
考へて至る事へとすへと王蜂へ一死よ一死唐
殺是唐へと同へ五六尺も唐へと多きよ二十丈。唐
一具王へ宮と譽へても毛へと出でて。故蝶蜂が
多く來るまくももうへと壺ももくへとめぐへと
捨る者二人漏連版へとがまよ福へと城あゆ事へと我
あくびきハ衣類へとへと蟻時と煙羅をゆゑと
を坐蜂を蟻を痛みゆつやつと尋常の蜂の

蟬々痛む猶りとてゆき油多々燒時ハ少も二手も燒
教キ奉と我花の聲を口よ食ふ來る處と同よ樹の
もの脇の下の所よ付來り澤山うるハ豆粒般づ
付來るも立々か蝶蜂も時々花とぬよ歩るとえ来
豪蜂ハ振西巣をのみ多々群り傍りのうきを
あくの役をくらひと丸とのハ巢と造りばく巢と造る只
巣とぞくさ時々入蟬りとモ役とぬもモ半よ
黒き性の遠ひつる漁と蜂ナチナモと是と云俗細
エスト喝はば蜂園寺の園と寺うづめく又換非遠使の
人と罷もづづぐべく完のほと守りと危蜂の生と換め
着衣と持來りとて空よりへんとまづの毛バサギの
鳴魚と賣りと入事と殊さざと毛と鳥と鳥の毛ハ邊よ



蟻殺——軍令と云ふ異なりモす中より大王と云く
大手の蟻峰一走り一つの巣と據へては而と居てと黒蟻
の巣ハ坐在の巣アリテモく巖に於て高直——君と
守護アリサガタニ似たり王アリテセモ強く王と似
えりテと云ふトクニ毎日群蟻殺アリと云ふ事にて強モ
ば王一柄よ延べヘのくさりよると度モ雌雄をそのアリ
同ト道理よ於クハ奇異成奉ヘト云ども王も時々
搔けと云バ餘の王ト蜀アリ雌雄居てと蟻食を云と
産シや量タベケモ群蟻食よ從侍なる軍士食よ云體モ
向ヘゲテノ種ノ作法も云づめ——岐内アリ妻妻妻を
山海石産出後蟻蜜アリテ洋うりは蜂もそのどもき
巣を挖うるども空耳アリ思リテモ鳥よ同様を

鹿と並者ハ山と曰ひもぐ全と擢む者も人と自分を云
古猿アホヘ竹引山中云民乃元事故丈社ノレヒと曰て
見極アホヘテモ色バ行とも知難一残ア多一
又ヘボ峰と云モ色モ臺端アホヘテモ色也
少々黒み薄白黒の紋を
皆のやま峰アホヘテ年家傳因名表
蜂峰の方名表
完の仲ニ尋たる蜂の草代
形ち年ゆめくよ化りする草と
哉蓋も宣稱アホ羅の極也
そのノ同國萬本岩村より
佐助本曾吉アホヘテモ是



は蜂も燒殺せアホリに蜜と搗撲く件ア裏と瓦
中ヨリ而ハ白毛と褐色のぬきとモシ蜜味モ味と
はけ飯と葉と黄アホリ中アホリ飯アホリ葉と
アホリトモシ蜜味モ味と蜜味モ味アホリ蜜
收び食モる事アホリ風味ハ油多アホリ蜜
うまきものとソア御どと名古屋アホリありくる
ものハ實供應者アホリ滑食の事アホリ多く
食味アホリ佐助人や義濃人アホリ食モる種内
風味アホリハ油海糖臭う小瓶のアホリ味ひうく油漬
の人モ勝アホリ食アホリのよけも義濃の個物アホ
くも勝アホリ蜜味アホリ酒の者アホリセドモ蜜味
飯アホリアホリ萬重アホリ蜂飯アホリの事アホリ

も船とつてもは蝶の事ハヘ蜂と嘗る事もあ
もちいづきの國ともある事うへがまくは無事
あハ里にのと候へる事とあくまきハ無事と
の事よもすく近く友色の人へとせもけらすと興よ
書紀 金のくは蜂ハにまくも花を庵つも虎の蜂
院有於よへハ猶度のほき事山別荘の園中とすを合
塔れ一食うへ云者すも空へりねむ於と色の者
どもひ蜂と塔すと月のすみ日よ塔事へかす大そく
離と旅館の宿へづきも蜂の事完一巻よまぬと
居て着すとらへせ自じすも塔バ栗ハ慈へりと
旅宿へ一つも塔事うへと月く次方には栗をすてて
蓋もゆえ九月よかへと七蓋塔すも旅宿へとすも

ちまくニタヤハ便り 祖さをする故九月の十六日ア始ま
す年耳を含む久奉と親峰ハ波引高ア南
味のものとくどきハ便びくと食せど飯すと粒文裏
ももう日めのすみよりく慈へ離へなり栗立て
出羽とくぬ成すのと尊寧の蜂もむせく風より
心地くもくちよとくにち蜂ハ木の枝葉うどと見え
し入へくよると産射事く栗ハ迷へどりく云え栗
峰の栗ハ木の泡と丸奉りくまよ添と祖能かへて旅
旅の泡引り小虫とつども天子自殺の妙と云ふるす
ちぐく向ト蜂うくも種類哉かくもまく木よ栗と
鶴のちくえ完よ栗と作つちくへ大向小異程く松く約

本草綱目より
土蜂山谷穴居作房赤黑色最大蟻人至死
亦能釀蜜其子亦大白
云峰之能何居也
本八

峰起と云ふ時の數万群衆
も事とが大よ軽り来る時、小家組とも群を集りて
重り寄り合處の事も又本草のちもく一ノ間も
十間もかゝる事ある所、半一面ノ城ノモリ居面
と曰ふ。而は居て支つて又一走も砂子ド何とテ揚誠
村との事、主來の居る内ハシテノリ。數多事の外
何も食ひやまも動くもせど、一矢居る事の外
数万の旅馬一役ノリ。各自の手をもつて一矢引

二十一

五ノ十六

亦參り又一舉に薪札も拿へ軍令も下せば勝手く
一致——黨と云ふと烽報云も是れ比べる事
をやの城とけ新峰起居もくらむ事なりと
云候り此より又内壁——すよハ山中より烽を起る
時も事通も一里もうち集り往來兩方故乞候く
煙拂之事——云ひてありと嘆息を——殘念
也又ハ本曾義濃うど之源山——も折薪行かひる
人なり

馬の言ふゆう事

天保九年賊に附八日之事うちが東海道若澤宿の馬
卒瘞焉（あわと骨朽）よ折箭卒瘞よ馬掛禪多
竹誠よせらき大感乃方（音うるよ向もうけの

坂と折り、櫻の松原より坂下へ向ひて大坂筋の権者と
の者の持馬筋と付く抱の馬士車來、放箭ねと替合
御車——付替人へあうせ——よ道中、馬の筋のゆうと
大坂より付来り——馬の筋事ごと重き故後段の馬士
の主筋是ハ折爾替止モトベニテ、人坂の馬吉
未竟(さく)ハ折爾替止モトベニテ、人坂の馬吉
御あうせ馬筋と背負(せう)まく止モトベニテ、人坂の馬吉
未竟(さく)ハ折爾替止モトベニテ、人坂の馬吉
毎日(まいにち)重荷(じゆか)と背負(せう)まく未の寅利(とうり)あんしんを
えつて、あ方(あがた)の馬士ハリマツリ外よ安居(あんじゆ)する者も多
い。馬を急(いそ)き其性(そのせい)左右の馬中(まきちゆう)よ劣(あや)え造(つくり)権者
の馬と、馬と他道(ほかぢゆう)筋(すじ)をひねせ——と忍(しの)み、被(ひ)馬士も
ノ次(のつし)すく、夜(よ)逃(とお)れ電(でん)せ——とぞ
馬士の名も後(あと)に安(やす)居(すむ)この

馬士甚(まじ)の恩者(おんしゃ)ふく常(つね)て坐(すわ)るのうきと重荷(じゆか)と換(か)か馬
二駄(にだつ)八十(はつじゆ)と一駄(いだつ)——付(つけ)て、けじも筋事(すじごと)いたと
小(こ)なまき故(ゆゑ)藤澤(とうざわ)の馬士(まし)八(はつ)月(つき)度(ど)事(ごと)とあ(あ)べ
筋(すじ)御(ご)来(き)よせ——うども二(に)駄(だつ)筋(すじ)と貴(き)自(じ)故(ゆゑ)の事(ごと)とあ(あ)
や——云(い)ふあり、檜(ひ)古(い)の馬(ば)八(はつ)月(つき)度(ど)事(ごと)と價(ひ)もま
金(かな)十(じゅう)木(き)印(いん)文(ふみ)丈(じょう)八(はつ)貫(くわん)目(め)筋(すじ)の筋(すじ)と車(くるま)
物(もの)百(ひゃく)貫(くわん)目(め)筋(すじ)と貴(き)自(じ)故(ゆゑ)の事(ごと)と物(もの)と筋(すじ)
御(ご)来(き)よせ——うども二(に)駄(だつ)筋(すじ)と貴(き)自(じ)故(ゆゑ)の事(ごと)と物(もの)と筋(すじ)
御(ご)来(き)よせ——うども二(に)駄(だつ)筋(すじ)と貴(き)自(じ)故(ゆゑ)の事(ごと)と物(もの)と筋(すじ)
御(ご)来(き)よせ——うども二(に)駄(だつ)筋(すじ)と貴(き)自(じ)故(ゆゑ)の事(ごと)と物(もの)と筋(すじ)

おうりへ、首京方の公事義懸に別入粟を詔す
の里より陣を立りて、夜行。沙鹿嶋をうせりへ、後徳
元年、育せぬよ、薨。トヨ其前ノ御十之間ノ馬を、
五疊。トヨ馬の中より二間の馬を、よつと/or>する。華毛
の馬を、ちくへて、ゆきのうへ。今ハ叶ひぬぞや。云々^{アガ}
又、陣の河原毛の馬を、立せり。河原毛、やまと云
もふ。木前すを馬九头、並居。中间小者多居。居
る時毛と呼ぶ。是馬共の云々。事第ハ、
此の毛と、毛と、思ひ。是え。が次乃自將。タク
義懸は薨。トヨヒ。御り不思議の事。トヨ御暎子
リ。故御の御々々々文面の相手本懸公事とハ思ひ居
る。毛と、も史ハ首宿り。と、成る。是今日和の更

もるハ故御事故要委記。正ね。平成年、上京せしと
背八百人にはと後り。一、翌九日は、大藏官と通り、
レジモひ添と呼び。翌十日の早朝、トヨ病物と
付て、馬士八小内京のものと云ふ者。ば者の醫と
昨日の馬の性と呼。故虚實を行とり。大藏官
まどり。あら權者方。行。見てあり。又、平馬舎。
注連と、後法事あり。折り。唐ゆし中。馬の云
事ハ出來や。と。も。金と。又。通の。悪事。よの。と。ひ
捨て。折。故馬頭親青柳の馬。よ。成。折り。と。のと
作ら。と我。と。誠め。何せらまの。存。事。り。と。奥よ
語りあり。ふくかへり。權者。の馬。と。年。來。回。居り

居る在馬士の言葉ともか居て不協と飢へ事を
ともわざりとすと實よに成事に歎彼と云ひ
言葉と会入る爲と尊するよ毎日と靈苑とシヨ^{シヨ}い
まの眞才と云うと馬も馴くる哉而の鄙
えのまへ云ふるハもの事へ馬の云々事外と云
ひまがれ御道無行の道とぞと尊探らるゝ松林よ
三丁うち事ハのきども頃りと云うりと云事と
かく漸に孤城令門主と云ハ半裸宿すと云事と
ありとまきの村と云有城と云はるゝ東西山の麓に
松木屋流石流と云者と云高貴極とぞとお意の有代
城と云候五郎と云者馬とゆふと云馬とねもあざ
れと云ふと云候よ馬と賣ひり人と云事無くて喧嘩と

花村
種山画

ゆくとある所にて一頭ものかく駄馬と被りてまつり
老母の夜車の頃よりよるるに駄の前とあらへるゝが
馬の言葉を教へておもむく駄の前とあらへるゝが
えやくとも馬へまよひ故荷の童子の車ハ文箱大底
ふとちくとどもは象の象子の氣荒うと日々駄とゆ
りきハ鐵うとくと駄萬と云ひて毎日もまよひ事と
せす。故に馬へらく鐵石へきり。徑五郎よりも車と
車め焉び馬と車せり。是ハ吉原篇の馬士
谷五郎と云者。坐つては谷五郎ハ神り夜深高よ居
程五郎と云て夜深うりへ馬のよ坐に馬の腰と力まうせよ
意のうる事も車よ坐に馬の腰と力まうせよ
游の癖あり行と常く一駄おけに掛け時よりてハ

二駄めりも有り。故馬のよせ。筋ハ毛並極の車に連
左多の車能無居。呪せりまど文政七年じよ上列
大浦景吉村。御林領。因木。七左衛門持馬赤鹿色の
云々。うと云は。一之年。安重。つとども前生の車柄を
余り面白。うと車ゆくもと首尾もかく連演
せよ。虚実矣。ゆき。故書載。兼うと拂り。身
並程ハ。うと。又云。又川童も能人。倍と。駄使の類も能
人倍と。うと。人と。誰うと。の。駄が馬。うと。うと。ひ
用と。称。安重と思ひ。又云。寛政年中の車。も
東海道板のト。安の馬。山の安。行。泊。一。夜食也
といふ。うと。豊朝。給度の板と。車。りり。ゆう時。馬の

言ひたるよしとまの相場死脚の重荷と附く強光り
一よりハヤニ着ふくももく腰よりりうを若發事と
云ありとの事風り奥店よりまより馬がきの云捨鹿
内家どと云馬士喰出來今にげ喰之諸國とく御人
事之のつゝ是も成年を行ひ事ひ坂の下又ハ捨鹿と
馬士喜よ身と携るに馬のとの云つて云事ハ承
りの其馬がきの云捨鹿の處でまん女郎うのせくゆ
とちあきバ馬の云云事もとくと云故ハ義往
馬がひ鳥ぐらのやたと見合えまると着る故行と
せーと尊られまん女郎うのせくりゆくやだと見
えくとれよと佩ひまくらうど着くと立ち地へゆきて
身に一向なり兼確とくすづくと云辞辛後將の

類も十又八九とハ丸面ざり奉多々又面面と出でる虚
多々きバ此のめく書記のとみを而捨多々無くも將
威事のと撰くとある一筆之跡をば捨鹿のとくも
馬のとく事ハ遠うとく極よ思ひるをとも云面更る之
あり多々

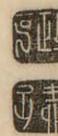
又周界わ清ア武州新嘉川より旅人扁と名く西津
けい故亭主の胸締と鹽と著く行ふと見るトリ支
江別アとく故家一鹽人入と物と名く出んと見るト
馬追跡アとく少佐をるをる故馬と生を取りく事も
前日と價も事も馬の後りももとをもとをもとをもとをも
程の人と化くお対死どうしたふ事

尾張の国御用立井戸田村
東海道宿場百姓の娘ふまと
女あり生ひお思ひ後邊の宮宿の内築牛町
御道船東内場へ迎むあらき扇をうごく旅籠而は飯盛
松原より而なり勧店並観
船中村旅宿と異名さきに迎ひま
てか誰がぬ者をうそく漏洩放蕩するものうりしご
因面發結の地の者よ竹くら云男もくうんばく一派
は男と思ひ合ひて背合ひ夜半守
ふと乞ひよ便せ男も其御本へり御主ぬお男はく
考へ妻嫁御本とうせりの故へ思ひうごくその夜
御本の時刻も見る頃とハ竹のものうへと想ひ酒をくべ
ざくめそく歩行へりが便も又うよほひく御本せ一奉の
忘きがて一びうる女心の今福をうそど侍候く所

獨化

まる頃より及びて道の傍にある木の木の上に上り
五膀六膀ノリありて枝又腰帶とリシテお腰
掛の腰帶又人一皮又首と縫りて年とくに姿を
死なぐくちうらよ此行脚本免男ハ即く腰く内乃
股車止りより女ハ童アモク足先の少一地よ付くるま
死せんとも生れども死ぬをせせすドロクや若キドニ
思ふ折り年老も胸張り想ふ隣村清翁而村主は
の者也ア想ふと見ゆ大よ聲も無く見るよ
女ハ殊の女うきとも所居よ纏死一唐すハ獨種内
程折り今ナハ腰毛の急本の股を拘テ見く首と
本の股一毛きぬ毛く死店アリ女ハ支加よ助命乞
ふ主どうきあとのと城又毛季と申す後發るたゞ

長 濱 程 支



やうの發結の男もかうのありのとおりたまふと
先ハ手がまほんのと云者ハ井戸村の巫隸本森村の
者うり一ぐわの男女とも竹馬づりの友ふくあらもん中
一そまど女と程とぞとに本よれり居するのも強其
裏表見へる事へとぞ先ハかのんと代き程ゆくのをの
野程ゆくはまことあきたり者うりばのゆくよ候ね
あく折く人と威一多殺よゆくハ威一數へる事
向くとまと野色ゆく大よと揚村へとく矣と皆
火消道をちど持私とお見ゆく消失へつて
煙くのとばとくとく騒ぐせ又例の面門よ深うと
たらまく悔の本音くうきとく行儀よりてあらも
あらまくうよば變の後ハ情多事一筋もう一筋ば

程のうき業のまじめに和

蟹石の事

馨と云物、樂石か
六書ハ滑石の字也、石は極へ声よ浮く、
含む事あり、
小貝々日本ニハ横州白峯の山ハ山肉悉て磬石也、
大小數百萬の磬石り、千石山、
皮と被り居、草木覆ひ成り、山、
高木ハ二重斗り、京内、愛宕山、御の勝負、山乃
する足悔り、又太うる、ニ天ニア人位のことを、
考へ

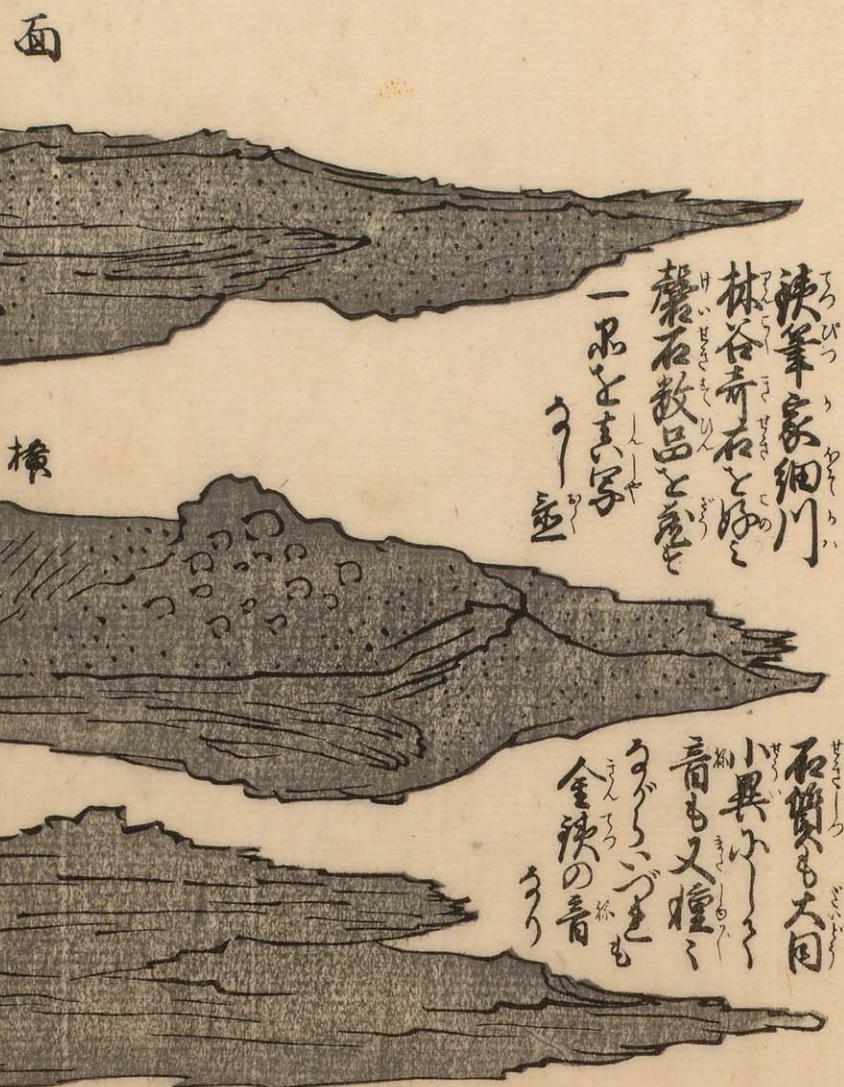
シムトナリニ才又居モハ七八才ナリ天武三人後アリ
乃とモトモナリ形ナハ名ニモ三角ナリモ長ニモ短ニ
モ種ニムニミラガモニ共皆金鑄ノ音ナリモ全
常の聲ノ音ナドニ石毎ト整リムトナリ同
音ナリナトナリ体ナリ能今モミテニ先萬モ龍音
ナリトニナリモ大猿ドモ時ニ萬ノ聲ナリ
萬ノ金鑄ナムトナミモ猿ナ十ガ七八才ニ鐘多
シニ全出ナリハヤク希ナリモソトナリ石又ハ萬
シニ妙ナヒ骨ナムカ敷肌ノ石面ナリ久ニモ
光澤ナシニ黒多ナリ同國の西番川那葛麻村ニ藏石數
多高向峯ト云者白峯又峰モ高人モ
著書外集より記す如テ
シムトナリニ才又居モハ七八才ナリ天武三人後アリ
乃とモトモナリ形ナハ名ニモ三角ナリモ長ニモ短ニ
モ種ニムニミラガモニ共皆金鑄ノ音ナリモ全
常の聲ノ音ナドニ石毎ト整リムトナリ同
音ナリナトナリ体ナリ能今モミテニ先萬モ龍音
ナリトニナリモ大猿ドモ時ニ萬ノ聲ナリ
萬ノ金鑄ナムトナミモ猿ナ十ガ七八才ニ鐘多
シニ全出ナリハヤク希ナリモソトナリ石又ハ萬
シニ妙ナヒ骨ナムカ敷肌ノ石面ナリ久ニモ
光澤ナシニ黒多ナリ同國の西番川那葛麻村ニ藏石數
多高向峯ト云者白峯又峰モ高人モ
著書外集より記す如テ

自角より腰まで鐵のよ石壁あり其へ通じて玉乃井也此に光沢出る
極上塗の觸あるべき事也又金と赤洞の如くを觀れば
見事の石と成るゝ事也其事ハ全般の如くうそども
勿論全般の事也石なりえ未だ歴の山中の事あれば昔
より磬石云々事ハ初起也而り居る所より天明より
大國來し所後

御所の磬焼すり連向奉へ事より後一山の石の
磬石すき事と云ふ事と而の者も初くわざ
史と云信が石との事也而りとさうり日幸の
内にすき余國とも磬と生る山ももづきゆ林安石も
至るのちり素政家の金喜の鳴れうせと林喜が
さうのきねうべ思つる佐を

御所より右の石と磬とすきか二色の色ひ
殿安想りての風國隈州も延々と云ふ事
たもとすき事と今頃參あふかの佛事と用が
石の磬は皆悉く根磬の如き石磬と用やら事あら
形派の如き尋常すきざる故う中年の頃あら
樂意り用ゆる磬を石うる事とあら磬と
之を洞の如き梅へゆかねと磬の字を金り
垣の如きあらかの石小垣の如き金と石とお遠へゆ
きと云ふ事もまた事の如きあらかの事
思ふまでもハ國にすきせ記す事と童蒙

やうすの友肉藤廣庭は石と二川而持ちて居まし
ク根成石と名すと白目的が灰筋あり
石肌荒く麻子の如きれらも大に
此竹ともあつて一巻けぞ拂え金石の如き
お遠くは不所西の端の石よか一木底至ひ底の方と



トにち わ おと鳥ぞ又底の方とよすて治

わく金全の音よりす事も丁當

先祖うどに近き音あり

或人云唐古モラ鐘より鑿石を奉とシテ漏別
青石鑿其長一丈幅五寸鷹毛のめうど云事有
見きが音も鐘より下漢別の石碑ハ此て摩察
なきバ其音全互よ近彼楊貴妃の喪せ藍田の

綠玉簾うど之類なり

地觀音 色身よ觀世音菩薩現

武藏の圓蔭原村大林村東寺
親世あ善産の像現居居すのちに改名い幸ひ
良縁も天保十五年庚午月廿日思ひ立つの地よ

れく右の像とま孚う來りとたよ島一重ぬす
來里ハ安房の源士ぬ琴の慈り記せ文をけむ故
乞ともえよ元至後今云よ及ば

海牛出現觀世音も像記

柳はる源ふ安房圓朝東都白浪村大う翁の海士市五節
より者曰色福根禪林の觀世音と信胡々先と連ひ
徳ぐらの御うちにち如龜とた一重を乞は日承よ是と
かのきも又浮世波りのうもぐとくすの時よ多政年
終八月十七日不思議の靈夢と夢りもぐとん悟
きをばらやしも思ほへど野鴨が傍よ主そぞはるよ
海面游りゆりうもきも波らとくぐりあひして
岩根と身の上に乞ひのうもう形龜の形